

追良瀬川～ウズラ石沢～白神岳

上小牧憲寛

昨年知り合った阿部さんは変わり者で、ネットで情報を調べた奥さんから上小牧のことを知り、一緒に山へ行きたがった。それまでの周囲の目は、私の短くなつた手指に注がれた後、感心はしたものご一緒にしたくないという感じだったので少々戸惑つたが、縦走登山をしてから 2 ヶ月後、昨年 9 月には 1 級の小和瀬川中ノ俣沢へ一緒に行つた。今年 6 月に裏の鞍掛山でロープワーク、懸垂下降などの訓練をした後、7 月に 2 級の高下川～高下岳および南八甲田逆川遡行～バッカイ沢下降へ行つた。以上の準備山行を行つた上で、4 級（3 級との意見も）の追良瀬川～ウズラ石沢～白神岳へ夏合宿を行つた。北東北に住んだからには、一度は訪れてみたい場所であった。

3 週間前には入山申請書を深浦森林管理センターに郵送した。1 週間前から 2 万 5000 分の 1 地形図と遡行図を見比べ悩んでいた。地図上白神岳に突き上げている沢と、吉川栄一編『沢登り、入門とガイド』に載っている遡行図の沢が違うものに思えたのだ。悩んだ末、地形図通りに遡行する計画とした。ガイドブックには「追良瀬川のような渓を、セカセカと遡ることはやめてほしい」と記載されており、3 日かけて遡行することにした。「最大の核心は渓、山、森といかに交感できるか、そこにこそあると思う」のである。

8 月 1 日朝 4:30 集合して出発した。今年東北地方は天候不順で、天気予報は 1 日曇、午後小雨ばらつき、2 日曇、3 日晴れ時々曇であったが、東北のすぐ東海上に梅雨前線が居座つておらず、天気予報はあてにならない可能性があった。したがつてセカセカしたくはないものの、追良瀬川本流とウズラ石沢の分岐点（出会い）までは 1 日目のうちに行っておきたかったのだ。そのため 3 時に起床して早出したが、30 分ばかり車を飛ばしたところで、私の愛車パンダのエンジンが止まつて、からなくなつてしまつたのだ。そうなると 20 分以上エンジンをかけずに休ませないと、エンジンが回ってくれないことは経験的に分かつてゐた。結局 1 時間遅れとなり、パンダを黒崎の白神岳登山口駐車場に置いて、阿部さんの軽ワゴンで追良瀬大橋に到着したのは 8 時過ぎになつてしまつた。そこには練馬ナンバーの車で来た先客数人がゴロゴロしながら準備をしていた。いくらセカセカするなと言つても、これでは海岸にたむろするトドの集団である。我々はさつさと支度をして先に出発した。

アブの群れと格闘しながら、約 20 分で追良瀬堰堤に到着。左岸の巻き道を通つて堰堤の上に出たが、その先左岸に沿つてまつすぐ遡ろうとしたら後ろから阿部さんが「これは支流のユキカブノ沢じゃないですか」と声をかけた。確かに川にしては細いと思っていたのであった。丸山東壁へ行ったときの北村、矢嶋、上小牧トリオの失敗が頭をよぎる。あのときは先頭が分岐点で丸山東壁への支流に入らずに下の廊下をそのまま下つたのに、後の

二人は疑いもせずのこのこついて行ったのだ。阿部さんはちゃんと「道が違う」と指摘した。「ごめんごめん、よく分かったね」と照れ笑いしながら本流へ戻った。

本流をしばらく遡り、右岸の河原を歩いていたら目の前にやや短くて銅の太い褐色の蛇がいた。どう見てもマムシである。私は石をぶん投げようかと一瞬考えたが、阿部さんは「は虫類は苦手！」と言って飛び上がった。5mほど遠巻きによけて歩いたが、さすがマムシ。飛びつこうと鎌首をこちらへ向ける。その後は岸を歩くとき注意した。

追良瀬川遡行の前半は標高差がないので、距離は稼げるが標高が上がらず、ずっと同じ標高が続く。そのため今自分がどこにいるのか少し分かりにくい。左岸に一ノ沢（ダケノ沢）現れるはずだが、小さな沢が何本か出てくるだけで、なかなか姿を現さない。やがて大きめの支沢が左岸から流れ込んでいる場所に着いた。一ノ沢であろう。そこを過ぎるとチゴルジュ風になったが大したことはない。そこを抜けてしばらく進むと二ノ沢（中ノ沢）が左岸より合流していた。二ノ沢を過ぎるとゴルジュに入る。右岸を小さく高巻くか泳ぐとガイドブックに書いてあるが、へつりで越えることが出来た。雨が続いたにもかかわらず、水量が少ないのかもしれない。

またしばらく進むと右岸より五郎三郎ノ沢が合流する場所に着いた。ここの左岸は幕営適地。しかし後続グループはここで幕営しそうであったし、まだ14時なので、先に進むことにした。大雨は降らなさそうだったので、滝ノ沢合流部先の河原に幕営しても良いと考えた。しばらく進むと左岸より三ノ沢（シワラノ沢）が合流。その先ゴルジュを越えて進むと滝ノ沢が左岸より合流した。その先の河原に幕営しようと考えていたが雨が降ればすぐに増水しそうだし、ゴロゴロした岩場で幕営に適さない。時刻は15時。この先へ進むとゴルジュを越えウズラ石沢合流部まで進まなければならない。しかし五郎三郎ノ沢出合まで戻る気にはなれない。結局前進することにした。

ホンノ沢が右岸から合流するところから先がゴルジュとなっている。阿部さんがついにへつりに失敗しドボン、覚悟を決めて泳いだ。それを見て笑った私も核心を越えた直後に気が緩んで重いザックに後ろへ引かれドボン。阿部さんを喜ばせた。そこを越えてしばらく進むとウズラ石沢出合。本日はウズラ石沢には入らず、追良瀬川本流をそのまま進んだ。少し先に幕営適地があるからだ。右岸の幕営地に16時着。もう少し高台に幕営したいところだが、その夜に増水することはないであろうと判断した。もし運悪く増水したら斜面を登るしかない。2~3人用ライトエスパースのフライシートだけ持って来たので、長い流木を支柱として立てシートをかぶせ、シートの端をスリング類で引っ張って石などに固定した。予めかみさんに切ってもらった野菜を沢水で煮てソーセージを加え、クリームシチュー・パウダーを混ぜれば美味しいシチューの出来上がり。それらを食べながら日本酒、ウィスキーを飲んだ。イワナは沢山いたが、ここは世界遺産。生き物を捕獲することは禁止さ

れている。

19時過ぎに就寝。私はシュラフカバーに寝たが、夜中寒くてカッパ上下を着た。それでも少し寒かったが眠ることは出来た。夜中小雨が降り増水を心配したが大丈夫であった。周囲が明るくなつたが本日の出発は8時である。もうしばらくゴロゴロした後シュラフカバーから顔を出すと、阿部さんはもう目覚めていた。時刻は5時。起き出して山用うどん、そばをゆでた。400円以上する品だが、要するにインスタントである。値が張る分、味は良かった。歯を磨き支度をして7時出発。5分か10分下るとウズラ石沢出合。左岸から合流するウズラ石沢に入渓した。しばらく進むといよいよ滝が現れた。なんとか登り先へ進むとプチゴルジュにかかるF2が現れた。左岸に高巻き用残置スリングがあるが、細くて古い。しかもそちらの側壁の方が登りづらそうで、落ちればグランドフォールである。インターネット上の『沢の扉—北海道、東北の沢』には、著者が右岸を、Kさん（この人、私の友達。テッシーとスーさんも会ったことがあります）が左岸を登ったが、左岸の方が楽そうと書いてあった。そこで私が左岸からへつって行こうとしたが難しい。阿部さんが右岸をへつって行った。そちらの方が簡単そうである。私もそちらへ転身して登った。

その後も小滝は現れたが印象はない。前述の『沢登り、入門とガイド』によればこの沢の核心はツメだ。「完璧な読図、沈着なルート・ファインディング、野性的方向感覚、神仏のお導きが揃えば、ヤブこぎなしで、白神岳山頂に立つことができる。」ヤブこぎなし。なんて甘美な言葉であろう。森吉山連瀬沢でも、小和瀬川大沢でも、ツメを誤り一人でかなりの大藪をこいだ。今日こそヤブこぎなしで山頂へ至るのだ。そのために何回も地図、遡行図とにらめっこしたのだ。私は分岐点に出たびに高度計で高度を確認し、コンパスで方角を確認して地図を読んだ。迷いはあったが、最終的には自分の感覚、判断を信じた。そして阿部さんに「どっちへ行く？」と質問していじめた。

そうやって詰めて行くと、沢に斜めにかかった木をのこぎりで切った跡があった。このルートで間違いない。そう確信して進むと、1200m地点に水場が出て来た。ここへは山頂非難小屋からも水汲みに来る。その先に最後の分岐点が出て来た。『沢登り、入門とガイド』の遡行図を見ると、左へ進むように思われるが、迷わず左へ。しかし約10mほど進むと目の前に笹ヤブが立ちはだかった。Kさん達はここをヤブこいで山頂に出たようだ。しかし私はヤブこがない人間である。最後の分岐まで戻り、右へ進んだ。しっかりした踏み後が続き、稜線の登山道へ出た。それを左へ進み、12時ゴール。山頂でハーネスやヘルメットを片付け、靴を履き替えながら阿部さんに「非難小屋に泊まる？それとも降りる？」と聞くと「降りたいです」と答えた。繰り返すがここは「最大の核心は渓、山、森といかに交感できるか、そこにこそある」白神山地である。急ぐことはまかりならないのだ。しかし曇のため海も見えない。しかも阿部さんも私も二児の父である。家族のためには下山を急

がねばならない。結局マテ山コースの一般道をセカセカと下った。駐車場手前の舗装道路を阿部さんより先に歩いていたら、ウサギと出くわした。向こうも突然の遭遇に驚き逃げるタイミングを失い、息を殺してじっとしている。口にくわえた草だけもぐもぐ食べ終えた。約4～5分至近距離でにらめっこしていた。しばらくすると足下の草を食べ始め、私が「阿部さんに見せたいなあ。来ないかなあ」とウサギから目を離して振り返った瞬間、ウサギは茂みの中に飛び込んで姿を消した。白神では狩猟も禁止されているから、ウサギの人に対する警戒心も弱いのだろうか。

駐車場で阿部さんを待ち、その日のうちに帰った。ただし家庭ではなく飲み屋へであった。北東北の自然はすばらしい。ヨッシーがこちらへ来たときに「本当に何もないところですね」と驚いたが、それは違う。都会の代わりに美しい自然があるのだ。本当は帰宅しようと考えていたが、帰りに米代川のほとりを車で走りながら、そのあまりの美しさに感動し、その気持ちを阿部さんと飲みながら語り合いたくなってしまったのだ。